

「逃げ出したヨナ」

(ヨナ書1章1節～16節)

「ヨナは彼らに言った。『私はヘブル人です。私は海と陸を造られた天の神、【主】を恐れています。』」(1:9)

仲森文穂

今日のメッセージ要旨

○時は紀元前8世紀。主人公はガリラヤに住むアミタイの子ヨナ。主がヨナを預言者として召し、アッシリアの首都ニネベに行って人々を悔い改めさせるよう求めます。ヨナはすぐ出発し、タルシシュ行きの船に乗り込みました。なんと東に行かず西へ、彼は逃亡したのです。なぜそんなことをしたのでしょうか。当時アッシリアは他国を侵略する恐ろしい国でした。ヨナにしたら「そんな所へ行って、自分に何ができるだろう」と思ったでしょうし、「神様は彼らの悪事をご存知なのに、悔い改めたら赦してあげる」なんて、私は納得しないとも思ったのでしょうか。神様が赦しても私は赦さないと言った時、人は神様以上に自分の正しさに固執し、自分を神として、生ける神様の御心から外れていくのです。

○そんなヨナの逃亡を神様が許す筈もなく、嵐を起こして阻止されます。嵐の中で、それぞれが信じる神様に助けを求める中、ヨナだけは船底で眠りこんでいます。ついに人々は、一体誰のせいで神様が怒っておられるのか見つけようとします。そしてくじを投げると、ヨナにあたってしまうのです。ヨナも「やはり海に行っても、主の手からは逃げられない」と悟ります。そして「わたしを海に放りこんでくれ。それで嵐は治まるから」と、自分が死ねばいいのだろうと開き直ります。船乗りたちは実行をためらいますが、とうとう「ああ、【主】よ。どうか、この男のいのちのために、私たちを滅ぼさないでください。あなたはみこころにかなったことをなさるからです」と叫んで、ヨナを海に投げ込みます。すると、嵐は静まったのでした。人々は大いに主を畏れ、いけにえをささげ、誓願を立てたと言います。これらの異邦人の人々の方が、ヨナよりもよほど信仰があつと思わされます。

○第1章はここで終わっています。ヨナは「慈しみに富みすぎる神様」に反感を抱いているのです。それがヨナの問題でした。そして、このヨナ書が書かれた理由もそこにあるのです。ヨナ書の舞台は紀元前8世紀、ヨナも実在の人物です。でも書かれたのは紀元前350年頃です。ユダの人々がバビロン捕囚から帰還して神殿や町を再建し、エズラが律法を持ち帰って、やがて神殿と律法によるユダヤ教が成立、民族を挙げて一致団結をはかろうとしていた時代でした。そんな時代に偏狭な民族主義に偏ることのないようにとの願いを込めて、異邦人の救いという世界的視野をもったヨナ書が書かれたのです。偏狭な思いにとらわれ、異邦人の町ニネベの救いを望まないヨナの心を、神様は嵐をもって揺さぶります。神様の憐れみと愛は、悔い改める人々に惜しみなく注がれることを彼に悟らせるためです。このヨナ書をかの内村鑑三先生は「旧約聖書の中の福音書」と呼んだそうです。納得できる話ではないでしょうか。こうして、話は第2章へと引き継がれていくのです。